

絶望からの生還—— 死を決意した青年

トッド・バーギン

☆

トッド・バーギン氏は、ベンチャーインワード誌の共同編集者。

☆

日本人ミツダシゲルはかつて、エドガー・ケイシーによって救われるまで、死の淵にいました。シゲルは 1958 年広島で生まれましたが、彼の驚くべき変容の物語は、実はそれよりもっと前、彼の父親が神は存在しないと確信したときに始まっていたのです。「私の父はとても頑固な無心論者でした。筋金入りの無心論者でした。」とシゲルは語ります。

シゲルの父親は、神の不在は科学が証明している、と信じていました。その信念は、彼がまだ若かったころから第二次世界大戦中も含めた年月の間に、彼のなかで培われたものでした。

シゲルの父親は 14 歳で、学生の身分のまま兵士として招集されました。彼は 4 年間で中国で過ごした後、シベリアへ移されそこで兵役を終えました。シベリアでは彼の戦友の 3 分の 1 が命を落としました。

ロシアに抑留されている間に、彼はマルクス主義を教えられ、宗教は非合理的であり靈魂や神は存在しないのだと信じるようになりました。

「人間が死んだら無になるのだ、ゴミになるんだよ。」と彼はよく言ったものでした。彼のこの信念は日に日に強くなり、自分の父親の葬儀にも出席しませんでした。そんなことには意味がない、父はもうここにはいないのだ、と考えたのです。そのためシゲルは人に教えられるまで、祖父が亡くなったことを知らなかったのです。

このような環境で育ったため、若いシゲルが神や靈魂の存在を信じなかったのは自然なことでした。シゲルは高校生になった頃から、人生の意味を探求するようになりました。彼が最初に向き合ったのは哲学(デカルト、カント等)でした。しかし、彼が出会った哲学者たちは靈魂の存在を前提としていました。当時の彼にとって靈魂などという概念は、何の意味も持たなかったのです。探求すればするほど、文化的、知的な苦悩は深まるばかりで、彼は存在すること自体に絶望していきました。「私は精神的に混乱し、病んでいました。」と彼は語ります。

日本社会では、よい仕事に就くためには、よく学び、よく働かなければならないと若者に教えます。

しかし、同時に日本社会は、死後の存在というものを否定しています。

そのため、日本の多くの人々は、生涯馬車馬のように働いた後に、消滅するだけの死を迎えなければならないという現実をどう受け止めればいいのか、苦悩しているのです。

シゲルは、このことが日本の自殺率が世界で最も高い水準にあることの原因だと主張しています。

そう言う彼自身も、その中の一人になったかもしれないのです。

彼はいつでも自殺できるように、100 通以上の遺書の下書きを残したのです。

幸いにもこのとき彼は死を選ばず、その後大学に進学しました。

彼の母親は彼に医者になることを望み、父親は弁護士になることを望んでいましたが、シゲルは哲学に進みたいと希望していました。しかし父の反対にあって、結局工学に進みました。

大学の講義は、やがて彼の日常生活の補足的なものに過ぎなくなっていました。

講義に出る代わりに、彼は図書館や書店で答えを求めて時を過ごすようになりました。

「哲学」のセクションに置かれているすべての本を読み終えたある日、馴染みのない一冊の本を見つけました。それがジナ・サーミナラによる『転生の秘密』でした。

シゲルは、翌日の朝までその本に読みふけりました。

そして読み終わるやいなや、喜びのあまり大声で叫んだのです。ついに探し求めていた答えを見つけた、と。

「われわれは単なる物質的な存在じゃない、霊的な存在なんだ」

彼は絶望から歓喜へ至ったのです。

ただし、それには、勤勉に働くことを教えながら、神の存在を否定している学校、教育機関に対する憤りも伴っていました。

エドガー・ケイシーは、彼に神の存在を知らせ、人生の危機から救ったのです。

彼はケイシーに救われた人生を、彼がついにつかんだ「使命」のために捧げようと決心しました。

そのためまず彼が最初にしたことは、『転生の秘密』の出版社に電話をかけ、営業職に採用してもらえるように頼んだことでした。

「日本中のすべての家庭に、この本が置かれるべきだと思いました」と彼は語ります。

しかし、出版社に採用を断られたため、彼は大学での研究生生活を目指すようになります。

そのときの彼の成績は、クラスの最下位でした。

彼はほとんどの講義をサボっていたからです。

彼を担当していた教授たちは、大学院の試験に合格するだけのレベルに達する可能性はほとんどなく、ほかの職業を考えたほうがいい、とまで彼に忠告したのです。

試験の1週間前、シゲルはその試験を受けているところを夢に見ました。

夢の中で試験問題まで見えたのです。

さらに試験の当日の朝、再び夢を見ました。

夢の中で、出てきた試験問題がハッキリと記憶に残りました。

試験当日のその朝、彼は夢で見た数学の問題を丸暗記しました。
試験が始まる前に、彼は数学問題が夢に出てきたはなしを友達に話しましたが、誰もそれを信じませんでした。

試験開始の時間になり、目の前に出された試験問題をみると、それは彼が夢で見た問題と同じものでした。
彼は驚きましたが、彼の友達はもっと驚きました。
何人かの友達は叫びました。「オー！」「なんだこれは！」
こうしてシゲルは最下位で合格し、2年後には修士号を得たのです。
卒業後は、日本政府が運営する原子力の研究所で、高度に専門的な業務に従事するようになりました。

それから4年後、さらに彼の人生を変える夢を見ることになります。
今度の夢では、彼はお風呂に入っていました。
入浴中、浴槽の中からあるプラカードが浮かび上がってきたのです。
そのプラカードの表には英語で『A search for God』という題名が印刷されていました。
するとそのプラカードが裏返しになり、裏には ASFG の日本語の題名が『神の探求』と印刷されていました。
彼はこの夢を見て、これは『A Search for God』を翻訳しなければならないというメッセージだと受け取り、翻訳に取り掛かりました。
この翻訳作業はとても困難なものでした。
その本に書かれていた多くの概念は簡単には日本語に翻訳できないものであり、その上、彼は本業を持っていたからです。

この時期、シゲルは人生を変えるような、ドラマチックな決断にふみきました。
彼は仕事をやめて退職金をもらい、その後の2年間を1日500円(約5ドル)で生活しました。
彼は聖書と、手に入れられる限りのケイシーに関する著作を研究することに時間を費やしました。
そうすることによって、さまざまな概念に対する理解をさらに深めることができました。
途中で中断もはさみながらの15年間の翻訳作業の後、『神の探求 I』の翻訳を完成させました。
その後シゲルはさらに6年間を費やして『神の探求 II』の翻訳を完成させました。
彼はケイシー関連作品の30年間にわたる翻訳活動の中で、ケイシーの伝記である『永遠のエドガー・ケイシー』を含めて、8冊の著作を翻訳しました。

ケイシーの著作の翻訳活動にたずさわった経験は、彼の妻が妊娠中に医師から子宮筋腫であることを告げられたときに、大いに役立ちました。
それは良性でしたが、合併症を起こす恐れがあるほど大きかったのです。
医師たちは、彼女が胎児を出産予定日まで身ごもっていることはできないだろうと言いました。
シゲルはケイシー・リーディングを調べて、ひまし油パックが有効であることを知り、それを彼女に施しました。
それにより、腫瘍は小さくなり、完全に健康な子供が生まれました。

シゲルはケイシーの著作を広めることで、日本の将来をもっとポジティブなものに変えたいと思っています。
彼は言います。

「私はエドガー・ケイシーの残した仕事は[福音]だと信じています。すべての人々にとっての[よき知らせ・福音]なのです。」

☆

MEMO

1992年、光田秀氏は100人のメンバーとともに、日本エドガー・ケイシーセンター(ECCJ)を創設した。現在では、700人以上の会員をかかえ、合衆国以外では最大のケイシーセンターとなっている。ECCJは機関紙『ワンネス』、及びニュースレター等を発行しており、日本全国でさまざまな講演、セミナー、会議、講習会などを計画、主催している。現在は、バージニアビーチの「ケイシー/レイラー・スクール」と提携したマッサージ師養成学校の創設準備が進行中だ。

ECCJは他に図書の貸し出しやケイシー関連の著作や翻訳、また、ケイシー療法関連商品や日本で独自に開発製造されたエドガー・ケイシーの健康用品の紹介もしている。

<2009年7、8月号より>